

寺山先生

札幌市医師会
手稲溪仁会病院

ふるた やすし
古田 康

なぜ耳鼻咽喉科を専門としたかについて、研修医などからよく聞かれることがある。私はただ一言、「寺山先生」と答えることにしている。

寺山吉彦先生と話をしたのは、私が医学部6年生のポリクリ（外来実習）の指導教授としてであった。患者をひとり一緒に診察した後の合間に雑談となり、お互い小樽市出身で、高校の先輩後輩（旧制小樽中学校、小樽潮陵高校）であることが分かった。今後の進路の話となり、「古田君、入局したら、臨床でも研究でも何でもやらせてあげるよ」と勧誘を受けた。根が単純、世間知らずの若者であった私は、迷わずに翌年耳鼻咽喉科医としてのキャリアを開始した。当時は研修医制度がなく、ストレートに専門診療科に進めた時代であった。

寺山先生には、短くはあったが定年退官までの4年間の指導を受けた。臨床は“何でも”はやらせてもらえなかったが、仕事についてはしつこいぐらい文献を調べるなどして、勉強して臨むこと、一つ一つのテーマをコツコツ継続することを教えられた。さらに退官の時に、病理学講座の新任教授であった長嶋和郎先生を紹介され、約束通りに基礎研究を経験するチャンスを得た。

寺山先生は退官後、手稲溪仁会病院の初代耳鼻咽喉科部長に就任され、大学の雑務から解放され、臨床と医学情報収集に専念された。その成果として、ブロー液という画期的な点耳治療薬を文献から発掘し、手稲溪仁会病院薬剤部で調整し、本邦に普及させた[1, 2]。驚くことに、75歳を過ぎた後期高齢者となってからである。

私は後任の犬山征夫教授、福田諭教授のご理解をいただき、10数年間大学勤務を続け、自分なりのテーマを持ちつつ仕事に打ち込むことができた。その間も時々寺山先生は大学に立ち寄られ、「古田君、この論文読んだか？面白いから読んでみな」など、弟子の仕事をフォローしつつ、絶え間なく文献検索を続けておられた。

縁あって2007年に手稲溪仁会病院耳鼻咽喉科部長として赴任することになった。寺山先生は既に顧問を退職されていたが、月に1度医局に来られ、英文雑誌の最新号に目を通し、興味ある論文をコピーされていた。また、80歳を過ぎてからランチョンセミナーで講演されたことをうれしそうに話されていた。享年88歳、北大病院で最期を迎えた時、枕元に医学雑誌を取り寄せていたと伺い、さすが寺山先生

と感銘を受けた。真にアカデミックマインドを保ち続けた師であった。

私は「Work hard, enjoy life!」を科のスローガンとして、良き同僚とスタッフに恵まれ、仕事も楽しんで続けてきた[3]。私の机の引き出しには寺山先生在任中の職員カードが残されている。このカードを見るたび、勧誘を受けた時のことを思い出す。

「古田君、入局したら、臨床でも研究でも何でもやらせてあげるよ」

私の選択は間違っていなかった。その通りにやってこられたのだから。

はからずも4月から院長職を任せられた。

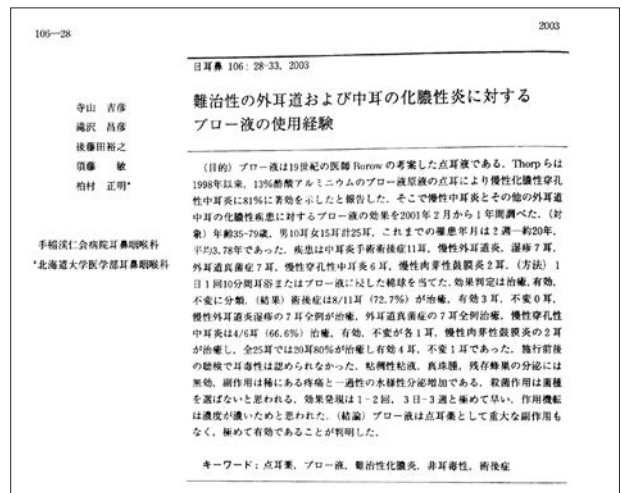
「寺山先生、約束がちょっと違いますか？」

メリハリをもって仕事に励み、生活を心から楽しめる職場を目指したい。

[1] 寺山吉彦、他：難治性の外耳道および中耳の化膿性炎に対するブロー液の使用経験 日耳鼻 106:28-33, 2003

[2] 寺山吉彦：ブロー液の不思議 耳喉頭頸 76:622-623, 2004.

[3] 古田 康：原著にあたれなかった一例 JOHNS 29:1059-1062, 2013.



文献 [1] の 1 ページ目